

第三回 九州戯曲賞 最終審査過程

九州地域演劇協議会まとめ

■ 最終審査日時等

平成23年6月18日（土） 大野城まどかぴあ

■ 最終審査候補作品（5作品）

たじま 裕一（長崎県長崎市）	「素敵じゃないか」
島田 佳代（鹿児島県伊佐市）	「四畳半の翅音」
川津 羊太郎（福岡県春日市）	「妄膜剥離」
福田 修志（長崎県長崎市）	「ワレラワラルー」
川口 大樹（福岡県糟屋郡志免町）	「すごくいいバカンス」

■ 最終審査員

永井愛、中島かずき、古城十忍、松田正隆、土田英生

■ 審査結果

大賞 島田 佳代（鹿児島県伊佐市） 「四畳半の翅音」

■ 授賞方針等

- ・大賞作がでた場合、原則として他の賞は出さないものとする。
- ・大賞作の水準に達する作品がない場合は、大賞なしとする。
- ・大賞作がない場合、佳作・奨励等の賞を出すことが出来る。

■ 審査過程

各作品について、審査員からの講評をおこなう

「素敵じゃないか」

不妊治療を続ける夫婦と、婚前の妊娠に翻弄されるカップル。二組のカップルのそれぞれの一年間を描いたもの。

不妊治療の大変さが伝わってくる。二つのカップルを演じるに当たり、二人芝居の男女を入れ替えるという部分に意図を感じるが、功を奏しているとは言えない。セリフのやりとりがよく書かれているが、得るもの深まるものがないという講評が寄せられた。

「四畳半の翹音」

九州では胸糸病という原因不明の病が流行しており、感染した者は隔離された。収容施設から川を挟んだ対岸のアパートに新たに越してきた女は、行方不明の弟を捜していた。

口蹄疫という現実の事件から発想して、空気感・世界観を作ることに成功していること。匂いや景色、空気を感じさせる筆力に評価の声があがる。社会的な導入からすると、後半は家族愛のほうに落ち着いてしまったところが惜しいという指摘がなされた。

「妄膜剥離」

うだつの上がないボクサーと、自分の「精神衛生」のために人を救済することを趣味にする女。彼らの日常を重ねていく様子を主に伝聞形式を用いて描いていく。

完成度が高く扱っている世界観が面白い、個人の年月の流れなどをつかみ取っているのは確か、女が男と同じくらい語ってくれたら面白いという意見が出る。一方、作劇の手法が岡田利規氏の手法に酷似しすぎている点が審査員の議論となった。

「ワレラワラルー」

動物園を舞台に、人間の世界と動物の世界の「家族」「恋人」「友人」などの関係をそれぞれ行き来しながら話が進む。徐々にそれぞれの世界の境界はあやふやになっていく。

読みやすい。ただ、動物が擬人化にとどまってしまっていて、人間と動物の二重構造が生きていない。自分の持っている常識と社会的概念を比べ、突き詰めて作っていたらもっと共感が得られるのでは。野心を持って取り組んで欲しいという意見が上がる。

「すごくいいバカンス」

シーズンオフのリゾート地。長期滞在型アルバイトの若者たちがまるで変化のない時間をダラダラと過ごす。そこにある日、新人のアルバイトが徐々に雇われることになる。3年連続残る実力はある。抵抗なく読み進めることができる。観客をつかんでいるだろうという評価が出る。また、集団で隔離された人間関係にみえない、立ち上がってくる世界・テーマが弱く、人間関係の世界を構築してほしいという講評が寄せられる。

(休憩)

一人持ち票2票で1回目の投票を行う。

「四畳半の翅音」 5票

「妄膜剥離」 5票

「四畳半の翅音」「妄膜剥離」の二作品に絞って審査を討議を重ねるが結論に至らず、一人持ち票1票で2回目の投票を行う。

「四畳半の翅音」 5票

投票結果を受け、「四畳半の翅音」が大賞に値する作品かどうかについて、討議を重ねた結果、審査員の意見の一致を見て、「四畳半の翅音」が大賞作品として選定された。